

学習会 未来が今より幸せであるという共通意識がなくては、意識変革は難しい!!

—「社会形態は、モラルに先行する」 たくさんのおしゃべりから多様な試行を!—

青野 豊一

テキスト 家の光協会刊『「農業を株式会社化する」という無理 これからの農業論』

★この本を使つての学習会で思考していく前に、参考資料として見田宗介著作集「現代社会の理論」(岩波書店)から文章を掲載したい。ここに書かれていることを踏まえて考えていきたい。

「二十世紀の後半は…「近代」という加速する高度成長期の最後の局面であった。この最終の局面の拍車の実質を支えていたのは<情報化/消費資本主義>のメカニズムである。」P.184

・古典時代の資本主義 消費市場の需要に対応する生産

例として、フォードの車、規格化された大量生産方式、低価格の堅牢な大衆車

<マルクスの資本主義理解は、この次元>

・車は、デザインと広告宣伝とクレジットで売れる

これは、GM の生産と販売の戦略である。情報化の様々な方法で車をファッション化した商品とした。定期的にデザインや性能を変更して、それを宣伝して車の借り換えを促し、需要を喚起した。これは、情報による消費の創出である。これにより、それまでの定期的な過剰生産恐慌を克服した。それと、IMF 管理通貨体制(ドル基軸)で世界経済の安定を図った。→1971 年金とドルとの交換停止、IMF 体制崩壊へ

しかし、2008 年のリーマンショック(金融の崩壊)によって GM は倒産した。これは、「証券化に証券化を重ね、国際化に国際化を重ね、…強固な現実であるかのごとき相貌を獲得した巨大な虚構のシステム」P.186 が一気に崩壊した。これは、<情報化/消費資本主義>の限界を露呈したものである。

「「近代」の思考の慣性のうちにある人間にとってこの「歴史の終息」は、否定的なもの、魅力に乏しい未来のように感覚される。」P.189

「おそらく大半の人々にとっては、少なくとも相対的に、またさまざまな条件付きでは、この情報化/消費化社会は、世界で最も魅力的な世界である。」P.109

「…魅力については誰の目にも見え、見えやすすぎるという仕掛けになっているから、…」

P.109

「ビートルズもディランもサンタナも、あの輝きと歓喜に満ちた 70 年代コミュニン*の日々も、この現代の情報消費社会の水準に支えられていた。情報と消費のシステム自体へのあらゆる批判と反発を許容しさえする「豊かな社会」と、その自由とに支えられていた。」P.110

「現代の消費社会の成功は、情報化を媒介として欲望を自由に創出することを通して、市場システムが自由な展開を持続するための、「需要の無限空間」ともいべきものを見出してということにある。それは欲望の文化的恣意ともいべきものの、「必要の大地」からの離脱を前提していた。」

P.124

必要とはただ生きて行くだけではなくして、快適に・健康に・安心して・楽しく・喜びを感じ取って生きて行くためのものである。生きて行くには喜びが、この期待が持ち得るという状態、地域社

会ではなくてはならない。だから、歓喜と欲望は、必要よりは根源的であるとも言い得る。これを感じ取ることができないのであれば、生きていることの意味を失うことになりかねない。だから、必要という下限が満たされていて、情報はこの上の歓喜と欲望へと開かれていないといけない。

③ 歓びとしての情報—社会経済が成長した後も、さらに成長することが健康的であるのは、非物質的な様相を変えていくことである。この在り方を変更していくことが大切な事となる。歓びとしての情報の発展は可能性としてありうるのだから、この方向へと、欲望と感受性を転回していくことしかない。考えられる一つは、文化活動の意味を高めていくことであろうと思われる。

第4章 平川克美「贈与のモラルは再び根付くか」P.159-の読解を通して

その実態・問題について少し述べる。田舎の毒に染まっている人たちは、実は旧来の近所の人たちにも心を開かない。地域外の世界との関係を積極的に持とうとはしない。労働者として働きに行っている会社と自分の管理している田畑と家庭内のことにしか興味関心を示さない。その他の事には、振り向かない。絵画や陶芸等の趣味にも、音楽にも、その他の文化活動にも関心を示さない。これらのクラブ等のいくつかの会合(アソシエーション*)と関わりを持とうとはしない。コンサートにも行かない。居住地から離れて多様な人の集まる場所・機会に参加してたくさんのおしゃべりをする、いろいろな情報が得られるのだが、…。今何を栽培しているのか、その栽培の仕方、技術を相互交流できることになるのだが、それなのに、私の周囲の居住地の人たちは、それをしていない。本を読まないのは仕方ないが、それならいろいろな講演会に参加して耳学問を身に着ければよいのだが、それもしない。市の社会教育の催しにも参加しない。情報はテレビと近所のおしゃべりである。そのおしゃべりも、どこかの家の悪口であったり、自分の家族(子供や孫や家柄)の自慢であったり、比較ばかりして足のひっぱり合いに終始している。まさしく、隣の不幸は蜜の味そのものとなっている。そして、隣の家に対して、嫌がらせをする。未来が今より幸せであるという意識を持ってないために、より一層!

これらの政策が、じわれじわりと日本国内の諸制度、諸システム、そして諸個人を崩壊させてきた。社会が人々を包み込み保護してきたそれまでの諸制度が一つ一つ壊されてきた。例えば分かり易いのは、公営企業が次々と民営化されたことである。利益を求めることを第一義とする民間企業にすることであった。

経済が良い時はこの問題が見えてこないが、これが不況や低成長となると、個々人の生活苦が、人間関係の変容・崩壊がはっきりしだした。その苦勞は、すべてが自己責任と宣伝された。これらの政策のため、それまで機能していた行政に頼らなくてもどうにかなっていた相互扶助機能が激しく揺さぶられていった。街の個人商店は、次々と閉じられていった。それまで家族や職場、そして地域での人間関係を通して必要な物・事を手に入れてきたそのシステムが機能しなくなった。それに代わって、インターネットやコンビニ、そして宅配で必要物を調達するようになった。近所や親戚など頼りにならない事態となってきた。都会は無縁社会化し、田舎はそれまでの相互扶助がなくなり慣行としての縛りだけが残った。つまりは、田舎の毒が濃縮されたのだ。

* 近代社会におけるアソシエーションの役割意味については、『近代都市とアソシエーション』古関隆 山川出版 世界史リブレット 119 を参照。